

創作音楽物語制作〈ピアノお話ワールド〉の 意義と課題Ⅱ ～授業と教育実践からみるピアノ表現力～

本廣明美、脇 聖子*、山城麻衣*、守田諭代*

Significance and Future Issues of a Musical-Making Project “Piano Story World” II: Expressiveness of Piano Performances Nurtured Through Lessons and Educational Practice

Akemi MOTOHIRO, Seiko WAKI, Mai YAMASHIRO, Satoyo MORITA

1. はじめに

本学科の鍵盤学習はピアノ力の中でも、イメージ形成の大切さを踏まえたピアノ表現力の養成に主眼を置き、4年間を通じて一連の学習プログラムを組んでいる。特に最後の集大成と位置付けた授業『鍵盤表現研究Ⅱ』は、ピアノ表現を軸に物語を制作し、学生自身がより主体的な学びとしてイメージした世界を構築していく中で、表現力を深く学ぶことを目的としている。〈ピアノお話ワールド〉と名付けたこの授業方法は、山口学芸大学教育学部教育学科が発足して以来11年間継続して行っている。

この度、授業担当者の有志が2グループに分かれ、2019年と2020年の2年間に渡って、この〈ピアノお話ワールド〉を取り入れた授業の分析を行い、ピアノ表現能力の獲得のあり方を考察することとした。2019年度研究においては、学習評価による習熟度の可視化を基に、この創作音楽物語制作〈ピアノお話ワールド〉の意義と課題について論じた¹。

その中で、特に問題視されたことは、読譜力の低下が数値により明らかになったことである。読譜力を高めるには、読譜の前段階である音楽構成要素の理解が弱いことが浮き彫りとなった。また、ピアノと物語をすりあわせる以前に、学生自身が表現のタイミングやアレンジの思考過程において、創意工夫が十分にできていないことも数値から見えてきた。これらから、学生自身の表現力を高めるのはもちろんではあるが、教育・保育現場での子どもの感性や音楽性を高めるピアノ実践力とは何かを問うことの必要性を感じた。

この授業のテーマとして「鍵盤表現の意義」「イメージと表現」「実践的なピアノ力」²の3つのワードを掲げているが、研究2年目となる本研究では、1年目の研究成果を受け、3つ目の「実践的なピアノ力」すなわち現場で活用できるピアノ力に焦点を当てることにした。

そこで、〈ピアノお話ワールド〉制作で培ったピアノ力が実際、現場で生かされるピアノ表現力となり、それが子どもの表現力を引き出すようなピアノ実践力に繋がっているのかについて研

* 山口学芸大学 非常勤講師

究する。それを実証させるために、まず授業において教育・保育現場の子ども達の前で発表することを十分に意識させ、創作段階においてどのような学生の変容がみられるかを考察する。次に子ども達の前で実践し、子どもや教員の反応やアンケートを分析することで、鍵盤学習のカリキュラムの中における〈ピアノお話ワールド〉の在り方の考察を行い、これからの課題にしたいと考える。

2. 教育・保育現場で必要な音楽力およびピアノ表現力

現場でピアノ力を活用するために、基礎的なピアノ能力の育成だけではなく、そのピアノ表現を通して子どもに何を伝え、どのような力を養成していくかを考える必要がある。表1のとおり、小学校学習指導要領音楽科（以下指導要領と記す）の中に“音楽的な見方・考え方”を働かせると掲げられており、中央教育審議会から示された答申では、この“音楽的な見方・考え方”について「音楽に対する感性を働かせ、音や音楽を、音楽を形づくっている要素とその働きの視点で捉え、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付けること」とされている。これらから音楽を形づくっている要素を理解し、それらの要素が生み出すその音楽のよさや面白さ、美しさを見だし、そこからイメージや感情と結び付けていくことに繋がるピアノ表現力の養成が求められていることが分かる。

本学科の鍵盤授業においては、その意味で表現の根幹にはイメージ形成が必要不可欠であると考え、それを主眼にカリキュラムを構成している。

表1. 小学校学習指導要領音楽科の目標

<p>表現及び鑑賞の活動を通して、音楽的な見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の音や音楽と豊かに関わる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。</p> <p>(1) 曲想と音楽の構造などに関わりについて理解するとともに、表したい音楽表現をするために必要な技能を身に付けるようにする。</p> <p>(2) 音楽表現を工夫することや、音楽を味わって聴くことができるようにする。</p> <p>(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽を愛好する心情と音楽に対する感性を育むとともに、音楽に親しむ態度を養い、豊かな情操を培う。</p>
--

1) カリキュラムにおける〈ピアノお話ワールド〉の位置づけ

表2は、鍵盤学習の集大成として〈ピアノお話ワールド〉を設定し、イメージ形成について段階を追って養成したピアノ表現力養成カリキュラムである。本学科での4年間の鍵盤授業の内容について、イメージ形成に必要な学習要素と指導要領との関連を含め、1年から順に追って述べる。尚、表2の1番右の項目に、表1のどの目標と関連しているのかを示している。

1年次では基本的なピアノ力を身に付けることを目的としている。それに加え、“基本的な動き”を表現する曲、“自由表現”をテーマとしたピアノ曲を用い、タイトルからのイメージを思い浮かべたり、音楽の構成要素からその曲の特徴を見だし想像豊かに演奏することを目指している。つまりイメージを抱き、そのイメージをどのように表現に繋げるかなど、イメージ形成力養成の基礎を行っている。これは、表1. 指導要領の目標に示されている「知識及び技能」の習得に関する目標である(1)と、「思考力、判断力、表現力等」の育成に関する目標である(2)の両方に通じるものである。尚、ここで挙げた指導要領の目標(1)、(2)はすべての学年の目標としてあてはまる。

表2. 4年間におけるピアノ表現力養成カリキュラム

鍵盤学習の集大成としての〈ピアノお話ワールド〉の学習要素

学年 期	主な学習内容		イメージ形成力の要素	学習指導要領との関連
4年後期	<p>＜実践演習3（総合表現）＞ 創作物語〈ピアノお話ワールド〉 ピアノ曲の選定 話の創作 ピアノ曲の構成 ピアノ曲のつなげ方 読み手、ピアノ表現のすり合わせ</p>		<p>音楽構成要素からのイメージ (曲の雰囲気や特徴的な部分の理解) タイトル(作者の意図)からのイメージ リズム・メロディ・ハーモニーのイメージ 伴奏形からのイメージ 全体の作品のイメージ (言語表現と音楽表現の組み合わせ) 発表対象である子どもをイメージ</p>	(1) (2) (3)
学年 期	主な学習内容		主なイメージ形成要素	学習指導要領との関連
	ピアノ演奏力・弾き歌い	ピアノ実践力		
4年前期	↑	<p>＜実践演習2＞ 〈イメージペイント〉 (言語活動を伴ったピアノ曲演奏) 一つの曲から二つのイメージ 読み手、ピアノ表現のすり合わせ イメージ付けに工夫を施す</p>	<p>音楽構成要素からのイメージ (曲の雰囲気や特徴的な部分の理解) タイトル(作者の意図)からのイメージ リズム・メロディ・ハーモニーのイメージ 伴奏形からのイメージ、調性感覚 全体作品のイメージ (言語表現と音楽表現の組み合わせ)</p>	(1) (2) (3)
3年後期		<p>＜実践演習1＞ 絵本の音楽付け (絵本の言語活動を伴ったピアノ演奏) テーマ音楽の作成 効果音の種類と奏法 作品とピアノ表現の関係 読み手、ピアノ表現のすり合わせ コード奏法</p>	<p>音楽構成要素からのイメージ (曲の雰囲気や特徴的な部分の理解) 絵本のタイトルからのイメージ リズム・メロディ・ハーモニーのイメージ 様々な効果音、伴奏形からのイメージ 調性感覚 全体作品のイメージ (言語表現と音楽表現の組み合わせ)</p>	(1) (2) (3)
3年前期		<p>二長調の伴奏付け、伴奏形、コードの理解 メロディ変奏、題付き変奏</p>	<p>リズム・メロディ・ハーモニーのイメージ 伴奏形からのイメージ、調性感覚</p>	(1) (2)
2年後期		<p>へ長調の伴奏付け、伴奏形、カデンツ即興</p>	<p>リズム・メロディ・ハーモニーのイメージ 伴奏形からのイメージ、調性感覚</p>	(1) (2)
2年前期		<p>ハ・ト長調の伴奏付け、伴奏形の種類、伴奏変奏、長調と短調</p>	<p>リズム・メロディ・ハーモニーのイメージ 伴奏形からのイメージ、調性感覚</p>	(1) (2)
1年後期		<p>自由表現(動物、乗り物、感情、物語・情景描写)をテーマとしたピアノ曲演奏、その他ブルグミュラーやソナチネアルバム、弾き歌い曲など</p>	<p>音楽構成要素からのイメージ (曲の雰囲気や特徴的な部分の理解)</p>	(1) (2)
1年前期	<p>基本的な動きの表現(歩く、走る、ジャンプ、揺れる等)をテーマとしたピアノ曲演奏、その他ブルグミュラーやソナチネ、弾き歌い曲など</p>	<p>4分音符、8分音符、2分音符などの音価と動きのイメージ</p>	(1) (2)	
全期	読譜、基礎知識、基礎奏法		<p>音楽構成要素及び読譜からくるイメージ</p>	(1) (2)

※音楽構成要素：音高、テンポ、強弱、奏法、フレーズ、拍、調など音楽を形作っている要素

2年次、3年次前期ではピアノ曲と弾き歌い曲の学習を並行し、子どもの歌や簡単な曲への和音付けの学習に重点を置いている。このように機能和声を学習することで、音の響きや和声感と同時に調性感やイメージ形成の養成にも繋がると考えている。また、伴奏型や調の変化におけるイメージの違いに気づかせ、伴奏型の工夫や転調といった発展的な内容の指導も行っている。

次に、3年次後期からは1年から3年前期までのイメージ形成の基礎を学習した上で、現場でピアノ力を活用するための3つのピアノ実践演習に入る。この実践演習では、学生が主体的、創造的に表現する学習を組み込んでいる。これまでの学習で掲げていた指導要領の目標(1)、(2)に加え、「学びに向かう力、人間性等」の涵養に関する目標である(3)の育成に通じるものである。

【実践演習1 絵本への音楽付け】

まず1つ目として挙げているのは3年後期で行う絵本への音楽付けである。身近なものや、空想したりイメージを膨らませることのできる絵本を用い、そのイメージに合うテーマ曲を作曲し、場面に合う様々な奏法や効果音(グリッサンドやトリル、トレモロ等)を付けることにより、学生自身のイメージ形成力の向上へと繋げていくことを主眼に置いている。

【実践演習2〈イメージペイント〉】

3年次までに身に付けたイメージ形成力をもとに、2つ目として挙げている4年前期で行う〈イメージペイント〉では、ピアノ曲に言葉を用いてイメージを付けることで幅広い表現力を養い、ピアノ表現力を高めるねらいがある。言語活動については、音楽科改訂の趣旨及び要点の中の学習内容、学習指導の改善・充実において、言語活動の充実と明記されている³。この中で、「音や音楽及び言葉によるコミュニケーションを図り、音楽科の特質に応じた言語活動を適切に位置付けられるようにすること」と謳われている。このように言語を用いた音楽表現活動として、音楽のみの演奏と比較するとイメージを抱きやすく、ピアノ表現力の向上に確実に結びつくと考えられる。そして単に演奏することのみの表現力に留まらず、保育現場や小学校での実践的なピアノ力、応用的なピアノ表現力を高めることに繋がる。

【実践演習3〈ピアノお話ワールド〉】

これらの学習内容を経て、3つ目の4年後期で学習する〈ピアノお話ワールド〉では、1年から4年前期までにイメージ形成学習で培ったピアノ演奏力や表現力に加え、現場で活用できる子ども達の音楽表現力をも引き出す総合表現力の養成を目指している。

2) 評価にみるピアノ力

1. で述べた通り、前論文では〈ピアノお話ワールド〉の授業内容と授業の達成目標に合わせて指導要領の評価観点と照らし合わせた具体的な評価項目を設定し⁴、習熟度の可視化を行った。その結果、学生全体平均点が最も低かった項目として以下の2つが挙げられた。1つ目は「曲の拍子・リズム・強弱・速度など、読譜を正しく行った上で、演奏することができたか。」という項目である。この項目は指導要領の目標「(1) 曲想と音楽の構造などと関わりについて理解する」に該当する。これはピアノ演奏においては読譜力にあたり、正しく読譜ができてはじめてそれらの要素が生み出すその曲のよさや面白さ、美しさを見いだすことができ、イメージを持つことに繋がる。2つ目に評価の低かった項目として挙げられたのが、授業内容「8. ピアノ表現とアレンジ(イメージを表現)」⁹「9. お話とピアノ曲及び弾き歌い曲のすりあわせ」である。これらは指導要領の目標(1)と(2)の表現領域に関する目標である“音楽表現を工夫する”に該当している部分である。これらは現場でピアノ力を活用することを意識した場合、応用的な表現力として必要不可欠な能力である。3. では特に後者に焦点を絞り、学生の変容を追っていくことにする。

3. 〈ピアノお話ワールド〉の現場実践を意識した学生の変容から見る事例

ここでは2人の学生Aさん、Bさんの作品を取り上げ、保育現場での実践を意識し〈ピアノお話ワールド〉の作品作りに取り組む中で、どのような変容を遂げていったかについて考察する。

1) ピアノ歴と作品紹介

(1) Aさんは保育職を希望している。ピアノ学習期間は小学校1年生から中学校2年生までの8年間である。

Aさんの制作した『永遠のライバル』と題した〈ピアノお話ワールド〉は、保育所及び幼稚園の園児を対象とした作品である。あらすじは、動物たちのマラソンを舞台にライバル関係にあるうさぎとりすが1位を争うが、ハプニングを通して相手のことを知り仲良くなるという話である。

(2) Bさんは保育職を希望し、小学生の頃から継続的にピアノを学習しており演奏能力も非常に高い学生である。

Bさんが制作した、『うさこと宝島』は、保育所及び幼稚園の園児を対象にした冒険物語である。主人公のうさこがおじいちゃんから渡された地図と1つ目の鍵を手し、残り3つの宝の鍵を手に入れるために島へと冒険に出かける。それぞれの島に住む登場人物から宝の鍵を手に入れた主人公は、その島に住む登場人物たちと一緒に宝探しの旅に出かける。全ての鍵を手に入れた主人公たちは4つ目の島へと向かい、手に入れたお宝とともにみんなで仲良く暮らすという話である。

2) 学習過程における工夫点の事例

本授業では、〈ピアノお話ワールド〉の制作にあたり、隔週で学生自身が進捗状況と創意工夫した点を記録した。それに加え選曲を終えた時点で、それぞれの曲の音楽構成要素を正しく理解し場面のイメージに合った演奏技法の工夫ができているか、学習シートへの記録(表3学習シート参照)を行った。この学習シートは、指導要領に示されている育成を目指す資質・能力の中の「知識にあたる曲想と音楽の構造」、「思考力・判断力・表現力にあたる演奏技法の工夫」、及び本学科の鍵盤授業で習得を目指している「イメージ形成にあたる情景や心情」の3つの項目を設定し作成したものである。

2人の学生の学習過程において、前論文で評価の低かった項目に焦点を当て工夫点を見ると、次に挙げる4つの共通する手法が見つかった。

手法1. 同じモチーフの使用

手法2. 音楽構成要素(表2下部参照)の組み合わせの変化

手法3. つなぎの工夫

手法4. 効果音の工夫

これらの手法から2人の学生がどのように作品作りに工夫を施したのか分析する。

(1) まず、Aさんの作品における工夫点を挙げる。

①1つ目は、以下の2つの手法を合わせた事例である。

手法1. 同じモチーフの使用

手法2. 音楽構成要素の組み合わせの変化

全体を通して走る場面が多く出てくるが、同じ「走る」⁵⁾という行動でもゆっくり、速く、軽やかに、力強く、上り坂、下り坂など、様々な特徴または状況がある。これらを表現するためにAさんは、特徴や状況に合う曲をそれぞれ選曲することを考えていた。しかし、既習曲のみではそれら全てに合う曲を選ぶのは難しい上、「走る」という同一のイメージが伝わりにくい印象を持った。そこで、「走る」場面で状況が変わるたび別の曲に変えるよりも、1つの曲をイメー

ジに合わせてアレンジする方が、状況が伝わりやすいと考えた。その中で、同じ曲でもテンポを変えることで状況の変化を表現することができ、さらに、音高や奏法、強弱やタッチによる音色の変化を加えることで、より一層イメージに近い音楽表現が可能になると考えた。

具体的に、ここで選曲した『かけ足（ツェルニー 100 番練習曲 10 番より）』について記録した学習シートを表3に示す。

表3. Aさん自身による曲の分析（学習シート）

曲名	曲想と音楽の構造 (知識)	情景や心情 (イメージ形成)	演奏技法の工夫 (思考力・判断力・表現力)
かけ足 (1～16小節)	明るい 速い 8分音符の和音奏 (左手部分)	レーススタートの場面 どの動物も一生懸命走っている様子	Allegro molto のテンポを保持して演奏
		丘を登る場面 今までよりきつく、つらい様子	2オクターヴ低音（音高） テンポを遅くする（テンポ） フォルテで重々しく演奏（強弱・奏法）
		丘を下る場面 軽やかに走る様子	1オクターヴ高音 テンポを速くする 軽やかに演奏

<楽譜1> 『かけ足（ツェルニー 100 番練習曲 10 番より）』(1～16小節)

「走る」部分を1つの曲に絞って、表3に示した場面のイメージにふさわしい表現で演奏することで、子ども達にも「どのような状況で走っているのか」を、言葉だけでなく音楽でもイメージし易いよう工夫したと考えられる。

② 2つ目は以下の2つの手法を合わせた事例である。

手法2. 音楽構成要素の組み合わせの変化

手法3. つなぎの工夫

レースの途中で雨が降りはじめ、雨宿りの場所を探しているうちに迷子になってしまう場面では、心細さや悲しさを表現するため短調の曲である『フランスの古い歌』（チャイコフスキー）を選曲した。

最初は「急に雨が降ってきました」という台詞と同時に曲の冒頭から弾き始めていたが、話と音楽を合わせると、それまでの『かけ足（ツェルニー 100 番練習曲 10 番より）』の軽快な曲から曲調の変化が突発的に感じられた。そこで曲に入る前に、雨が降る様子を効果音で表現する方法を提示し、ポツポツという雨音を探していった。その中で、効果音を作り出すよりも、<楽譜2>に示す『フランスの古い歌』の17～18小節の左手部分が、雨の降る様子に合っているのでは

ないかと思いついた。また、曲調の変化だけでなく話の展開も唐突に感じられたため、音楽のみをしばらく演奏することで状況の変化を印象付け、そのあとに話を始めることにした。さらにテンポや強弱で雨の様子を表現することもできるのではないかと提案した結果、Aさんは少しずつ雨が降り始め、だんだん本降りになる様子を *accelerando* と *crescendo* で表現することができると考えた。具体的には、〈楽譜2〉に示した左手部分を3回繰り返し、3回目で「急に雨が降ってきました」という台詞を入れ、4回目で *accelerando* と *crescendo* をかけていった。そして、そのまま〈楽譜3〉の1小節目に戻ることで音楽の流れを止めることなく繋げるよう工夫をした。なお、1小節目のアウトタクトで示されているD音は省略して演奏している。

表4. Aさん自身による曲の分析（学習シート）

曲名	曲想と音楽の構造（知識）	情景や心情（イメージ形成）	演奏技法の工夫（思考力・判断力・表現力）
フランスの古い歌 (17～18小節左手のみ)	短調 スタッカート ピアノ（強弱）	雨が降り出した様子	最初はポツポツ降る雨を長めのスタッカートで、ゆっくりピアノで表現（テンポ、強弱） 徐々にテンポを速め、本降りになる様子を表現（テンポ）

〈楽譜2〉『フランスの古い歌』（17～18小節）



〈楽譜3〉『フランスの古い歌』（1～8小節）



③3つ目は、以下の2つの手法を合わせた工夫点を挙げる。

手法3. つなぎの工夫

手法4. 効果音の工夫

『かけ足（ツェルニー 100 番練習曲 10 番より）』を楽譜通りの高さから2オクターヴ低音に移動する際、またその後1オクターヴ高音に移動する際、一旦音楽が途切れてしまっていた。そこで、その間を埋める奏法として、音階による移動やハ長調のIの和音を使ってアルペジオで移動する方法、そしてグリッサンドでの移動を試行した。その中で低音域に移動する際には登り坂のきつい様子を連想させるためゆっくり滑らせるグリッサンドを、高音に移動する際には速めのグリッサンドを使用することで、音楽の流れを止めることなく演奏することができると考えた。

<楽譜4> 『かけ足 (ツェルニー 100 番練習曲 10 番より)』 移行部分のグリッサンド

④手法 4. 効果音の工夫

<楽譜5> トリル & アルペジオ

3年後期の授業で学習した効果音（グリッサンドやトリル、トレモロ等）を付けることで、台詞をより強調することができると思った A さんは、レーススタート時の「いちについて よーい」の部分で細かいトリルを入れ、「ドン！」に向かう緊張感を表現した。さらに、「ドン！」の部分で和音のアルペジオを速く弾くことで、スタート時の瞬発性を表す工夫をした。

(2) 次に B さんの作品における工夫点について考察する。

①手法 2. 音楽構成要素の組み合わせの変化

B さんも A さんと同様にテンポの工夫を行っている。A さんが1つの曲を様々なテンポで使用したのに対し、B さんは1つの曲の中でその場面の雰囲気にあわせたテンポ変化を施している。B さんは1つの曲から a) わくわく感、b) ゆったりした雰囲気、c) 気持ちの更なる高まりといった3つの要素を感じ取った。話と音楽を合わせると、それぞれの場面で曲を変えるのではなく、場面にあわせてテンポ変化を行う方が統一性を持てると考えた。なお、B さんも A さんと同様に学習シートを記入し分析を行い、それを基にテンポの変化を行った。

②手法 3. つなぎの工夫

B さんは、鳥を移動する際に使用する楽曲を『気球にのってどこまでも』⁶に統一している。

<楽譜6> 『気球にのってどこまでも』前奏 (1~6小節)

この6小節が前奏部分である。この前奏を演奏した後、<楽譜7><楽譜8>へそれぞれスムーズに移行するために B さんがどのような工夫を施したのかを述べる。

a) つなぎの事例 1

主人公と1つ目の島で出会った少年が“スイーツ島”から“からくり島”へと移動する場面の終わり方を見ていく。〈楽譜6〉『気球にのってどこまでも』はハ長調の楽曲であり、Iの和音の両手伴奏後に歌へと続く。Bさんは、Iの両手伴奏からすぐにC.ドビュッシー作曲の『ゴリウォークのケーキウォーク』に繋げようとしていたが、この曲は変ホ長調であるため、アレンジを加えずに移行することに違和感があった。そこで『ゴリウォークのケーキウォーク』の開始音がB♭であることに着目したBさんは、ハ長調のIの和音から、変ホ長調のVの和音の両手伴奏を経由した後、この曲を開始すればスムーズに行くのではないかと考えた。しかし前奏からそのまま進むと『ゴリウォークのケーキウォーク』の特徴でもあるシンコペーションのリズムが生かされていないのではないかと感じた。

〈楽譜7〉前奏後に施したアレンジ1から『ゴリウォークのケーキウォーク』への移行

The image shows two musical staves. The top staff is in 4/4 time, showing the end of a piece with a final chord and a large arrow pointing to the right. The bottom staff is in 2/4 time, marked 'Allegro giusto', and shows the beginning of 'Goli Walk' with a syncopated rhythm. Dynamics include *f*, *piuf*, and *sf*.

そこでBさんに「両手伴奏形からすぐに楽曲に移行するのではなく、変ホ長調のVの和音のアルペジオを挟み、曲間にあえて空間をもたせてはどうか。」と促した。そこですぐに移行するパターンと、あえて曲間を設けて進む2パターンを弾き比べてみた。するとアルペジオを経由して次に進む方が、次の楽曲のシンコペーションのリズムが明確に聞こえ、ロボットの機械的な雰囲気より一層引き立たせることができた。Bさんもこの楽曲に関して以下のように記述している。

表5. Bさん自身による曲の分析（学習シート）

曲名	曲想と音楽の構造 (知識)	情景や心情 (イメージ形成)	演奏技法の工夫 (思考力・判断力・表現力)
ゴリウォークのケーキウォーク (1-9小節)	4分の2拍子 ユニゾンでおりてくる。	からくり島なので固い感じ。 ロボットの機械的な雰囲気	ロボットの機械的な雰囲気 を、シンコペーションのリ ズムやアクセントなどの音 の動きで表現する。

また、冒頭2小節のシンコペーションのリズムで、機械的な雰囲気を瞬時に表現するために、あえて鋭くはっきり演奏するなど奏法の点においても工夫がみられた。

b) つなぎの事例 2

“からくり島”から“お化けの島”に移動するシーンでも同様の工夫がみられる。お化けの一般的なイメージは“怖い”というイメージを最初に抱く人が多いだろう。先ほども述べたように移動の際に使用する曲〈楽譜6〉はハ長調の楽曲である。ハ長調のまま終えてしまうと、“怖い”

というイメージを子ども達に与えることは難しい。そのためハ長調の両手伴奏から徐々に＜楽譜 8＞に示すように同主調であるハ短調に転調し dim. することにより、曲の雰囲気感を暗くすることにした。そうすることで、子ども達がお化けに対して持っているであろう“怖い”というイメージを誰もが連想できるように、和音と強弱に加え、這うようなタッチで演奏するなど奏法の工夫も行った。

＜楽譜 8＞前奏後に施したアレンジ 2



③手法 4. 効果音の工夫

Bさんは話の中で効果音を積極的に活用している。特に苦労した効果音がお化けの島に到着し暗闇の中から姿を現す場面である。この場面の恐怖感をピアノ曲で表現し、子ども達に連想させることは難しいと考えた。Bさんはどうすれば暗闇から人が現れる不気味な雰囲気感を表現できるのか試行錯誤を重ね、＜楽譜 9＞の4つの和音進行を用い4小節における3拍目を辿り D - Es - E - Es の半音階を作り出すことにした。この和音進行は、恐怖感や不安感を増長させる際に多用されており、犯人が被害者を追い詰めていく場面でよく耳にするため、この場面において非常に有効なのではないかと考えた。

＜楽譜 9＞主人公たちの恐怖感を表現した効果音



この4つの和音進行をゆっくりと繰り返し演奏することによって主人公たちが暗闇の中で感じている恐怖感や不安感を表現した。

＜楽譜 10＞暗闇の中から現れる人影を表現した効果音



※音のかたまりを表現するクラスターという手法を低音で使用している。

その後＜楽譜 10＞の通り短2度で連ねる半音の C - Des - C - H の4音をターンのように使用しテンポを次第に速めることで、暗闇からだんだんと人影が浮かんでくる様子と主人公たちの恐怖心を表現した。その後すぐに低音でのクラスターを使用することで、暗闇から突然姿を現したもう1人の人物にびっくりするという主人公たちの心情の推移を、効果音のみで的確に表現できていると考察できる。実際にBさんもピアノ曲をあてはめるより、効果的にその場面の雰囲気感を表現できると感じていた。ここでは、特に工夫が見られた効果音の使用を2つほど取り上げたが、Bさんは登場人物たちの心情や鍵を開けるなどの情景を子ども達がイメージしやすいよう、様々な場所で効果音を使用している。Bさんは効果音を使用するにあたり、ただ単に手法を使用するのではなく、使う音の種類や高さにも徹底的に拘り自分のイメージに1番近い音や奏法で表現することができている。

ここでは、前論文の結果を受けて評価の低かった項目に焦点を絞り、2人の学生の変容について考察した。実際に2人の学生はY市のK幼稚園に出向き作品発表を行った。現場で発表することを念頭に作品作りを進めていくことで、選曲や奏法においては未学習曲、学習済みの曲ともに曲の構造やイメージを捉えることにより、子ども達に伝えるための創意工夫点として共通する4つの手法というものが見えてきた。また、奏法上の工夫だけでなく授業中の学生とのやりとりの中でも、子ども達を意識した発言も非常に多く見受けられた。現場を意識した作品作りというものが、学生自身の知識、思考力、判断力、表現力の幅をさらに深め広げていくことに繋がったのではないだろうか。

4. 小学校現場実践におけるピアノ表現力の考察

3.では、学生の授業での変容を見てきたが、4.では教育現場の子ども達の反応から、子ども達が話を伴ったピアノ表現をどのように理解し、このピアノ表現が子どもの表現力を引き出すことに繋がっているのか、小学校での実践記録から考察を行う。

実践概要は次の通りである。

<実践概要>

- ・日時、場所 令和2年2月18日、Y市S小学校
- ・対象者 1、2年生約25人
- ・発表者 山口学芸大学初等幼児教育専攻4年生6名(作品制作者3名とナレーター3名)
- ・記録法 2台のビデオカメラ設置(前方右側1台、後方中央1台)
アンケート(児童と先生方7名)

実際には小学校で3作品ほど実践したが、ここではその中の1人であるCさんを取り上げる。実践後、Cさん本人が作品作りにおいて特に工夫した点を記述したアンケートと、子ども達や先生方にとって自由記述アンケートを比較した。さらに、記録ビデオから見えてくる子どもの作品に対する反応と、Cさんの作品作りにおける工夫点との関係性を比較することで、工夫点が実際にどのように活かされているのかを述べる。

Cさんの事例

(1) ピアノ歴と作品紹介

Cさんは3歳から中学校までに、断続的にはあるが11年間ピアノを学習していた。中学校では合唱の伴奏や吹奏楽部に所属するなど、音楽は比較的好きな学生である。小学校教諭を目指しており、小学校低学年を対象に「優しさ」をテーマに作品作りを行った。

作品名は、『ふしぎなゆびわ』である。ストーリーは願い事が叶う3つの宝石の付いた不思議な指輪を、リサという女の子が手にしたところから始まる。リサは、指輪を狙った魔女のおばあさんに追いかけられ、崖から落ちるが1つ目の宝石の力で助かる。願いが叶うと宝石はパリンと割れ、残り2つとなる。再びリサは魔女に追いかけられるが、今度はルカといううさぎに助けられる。ルカは魔女によりうさぎに姿を変えられてしまっていた。そしてルカから、リサが持っているのは願いが叶えられる指輪だと聞く。しかし、2つ目の願い事を何も考えず自らの欲望にまかせ、自分の食べたい大きなケーキを出し食べてしまう。自分のことしか考えていなかったリサだが、最後1つの願いをルカのために使おうと決心する。ルカはリサの優しい気持ちに触れ、元の男の子の姿に戻る。そして、リサに元の世界に戻るための鍵を渡す。リサが鍵を開けた瞬間に目が覚め、夢だったのか!?!と記憶を思い返していると、机の上に宝石の割れた指輪を見つけ、

話が終わる。

(2) Cさんの作品作りの工夫点における教育現場の反応

Cさんの作品概要を表6に示す。これを基に場面ごとの子ども達の反応と子ども達のアンケート結果をあわせて以下に述べる。(表6☆1～☆11を参照)

各場面における子どもの反応

<場面1>

『ウィンナマーチ』が流れると、子ども達は話にじっと耳を傾け、目をきらきらさせる様子やワクワクした表情が見られた。(☆1参照)

高音トリルの効果音に対して、ハッとピアノに注目する様子が見られた。(☆2参照)

<場面2>

おばあさんに「指輪を返しておくれ。さもないと指を切ってしまうよ!」と脅される場面では、台詞に注目してもらうため、あえて一旦ピアノの演奏を止めた。すると子ども達は心配そうな表情や、不安そうな表情を見せていた。(☆4参照)

<場面3>

リサが崖から落ちる挿絵とともに高音から低音にかけての半音階が流れると、子ども達は不安そうな表情をし、ピアノと絵に注目していた。(☆5参照)

リサが「助けて!」と叫んだ瞬間、体がふわりと浮かび指輪の宝石が割れた場面では前打音による効果音を使用した。この効果音については子ども達のアンケートで最も多く意見が見られた。挿絵には宝石の割れた場面は描かれていなかったが、アンケートに「指輪がチャリンといったときにピアノでチャリンと鳴る音楽が再現されていてよかった。」などの記述が多くみられた。実際の反応においても効果音が鳴った瞬間ハッとした様子でピアノに注目している様子が見られた。(☆6参照)

<場面2>と<場面3>は、子ども達のアンケートに、「ピアノの演奏と絵の動きが合っていた。」と書かれており、Cさんの工夫した演奏効果がよく表れていた場面だと言える。(☆3、4、5、6参照)

表6. Cさんの作品発表の概要

場面	音楽の流れ (曲名と効果音)	情景や心情	演奏上の工夫
場面1 ・主人公のリサが、お花畑で花かんむりを作っている。 ・夜、指輪を見つける。	曲1 ツェルニー作曲: 『ウィンナマーチ』 (Trio部分8小節まで)	・花畑(晴れている) ・楽しい ・わくわく	・軽やかに、スタッカートを意識し演奏することで、これから始まる物語のわくわくした気持ちを表現する。(☆1)
	曲2 フランス民謡:『キラキラ星変奏曲テーマ ⁷⁾ 』(16小節まで)	・夜(月明かりが差している) ・リサが眠っている。 ・リラックス	・少し弱く mp で演奏。 ・ゆっくり
	効果音1 トリル	・指輪を見つけたリサが、宝石の光でまぶしがっている。 ・驚き	・キラキラと光る様子を高音の効果音で表現し、絵だけでは伝わらないところが伝わるようにした。このように、オノマトペに音表現を付け、子ども達が想像しやすいようにした。(☆2)

場面2 ・リサが急に暗い森にいる。 ・魔女のおばあさんが話しかけてくる。 ・魔女から逃げる。	曲3	クラック作曲：『魔女たちのおどり』	<ul style="list-style-type: none"> ・急に暗い森にいる。 ・不安な気持ち ・いったいこの人は誰？ ・不気味な魔女のおばあさんが話しかけてくる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・強弱や、速度を変えて演奏するように意識する。 ・曲の入りは弱く p で、クレッシェンドにしてだんだんと怖い雰囲気が出るようにした。また、終わりはデクレッシェンドにし、次の曲に繋げるようにした。(☆3)
	曲4	なかだよしなお作曲：『土人のおどり』(3～8小節演奏後2番カッコを演奏)	<ul style="list-style-type: none"> ・焦りと恐怖 ・魔女のおばあさんが追いかける。 ・リサが走って逃げる。 ・どうしよう、誰か助けて。 	<ul style="list-style-type: none"> ・曲3からそのまま繋げるのではなく、一旦曲を止めて魔女のセリフに注目してもらえるようにした。(☆4) ・スタッカートを強調し、リサが焦って走っている様子を表現する。 ・強く f で演奏し、追いかけられている焦りと恐怖感を出す。速度を変えてリサが魔女から逃げる様子を表現して演奏するように意識する。
場面3 ・魔女に追い詰められ崖から落ちてしまうが、1つ目の宝石の力で助かる。	効果音2	半音階	<ul style="list-style-type: none"> ・崖まで追い詰められリサが崖から落ち、体が空中に投げ出される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・高音から低音にかけての半音階で崖から落ちる様子を表現し、加えて低音にかけてのクレッシェンドをかけ表現する。(☆5)
	効果音3-1	前打音	<ul style="list-style-type: none"> ・リサが「助けて！」と叫んだ瞬間宝石がパリンと割れ、身体がふわりと地面につく。 ・何が起こったの？と不思議な様子 ・助かり少しほっとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・宝石の割れる音を高音の効果音で表現した。 ・3つの宝石が割れる時は全て同じ効果音を使用し、子ども達に分かりやすくした。(☆6)
場面4 ・また魔女が追いかけてくるが、うさぎのルカが現れリサを助けてくれる。 ・ルカと色々な話をする。	曲5	ブルグミュラー作曲：『心配』(16小節まで)	<ul style="list-style-type: none"> ・再び魔女に追いかられる。 ・恐怖 ・追いかけているところをうさぎのルカが話しかけてきて助けてくれる。 ・このうさぎは誰だと不思議に思う。 	<ul style="list-style-type: none"> ・軽やかに ・弱く p で ・曲の入りはクレッシェンドで恐怖を表現し、終わりはデクレッシェンドで次の場面に自然と繋がるようにした。(☆7)
	曲6	ゴセック作曲：『ガヴォット』(16小節まで)	<ul style="list-style-type: none"> ・魔女から逃げ切り安心する。 ・ルカと色々な話をする。 ・温かい雰囲気 	<ul style="list-style-type: none"> ・軽やかなスタッカートで演奏する ・話をしているところは優しく mp で落ち着いた演奏する。 ・強弱や、速度を変えて演奏するように意識する。(☆8)

場面5 ・1度食べてみたかった大きなケーキをお願いし、2つ目の宝石が割れる。	効果音 3-2	前打音	<ul style="list-style-type: none"> ・なんでも願いが叶えられると知り、ウキウキした気分。 ・ワクワクが止まらない様子 ・ルカの忠告を聞かず、1度食べてみたかった大きなケーキをお願いし、2つ目の宝石が割れる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・指輪の割れる音を高音の効果音で表現した。(☆6-2)
	曲7	ブルグミュラー作曲：『狩猟』(5～28小節)	<ul style="list-style-type: none"> ・大きなケーキを食べる。 ・楽しい ・わくわく 	<ul style="list-style-type: none"> ・軽やかに ・ゆっくり ・スタッカートで楽しい雰囲気を出す。(☆9)
場面6 ・3つ目の最後のお願いでルカが元の男の子の姿に戻る。 ・リサが元の世界に帰れる鍵をもらう。	効果音 3-3	前打音	<ul style="list-style-type: none"> ・最後の3つ目の願いをルカのために使う。 ・決心、ルカに助けてもらった感謝の気持ち 	<ul style="list-style-type: none"> ・指輪の割れる音を高音の効果音で表現した。(☆6-3)
	曲8	シューマン作曲：『トロイメライ』(8小節まで演奏後、初めに戻り5小節演奏。その後最後3小節に飛び演奏)	<ul style="list-style-type: none"> ・ルカがリサの優しい気持ちで元の男の子の姿に戻り、別れの場面 ・帰りたいけど寂しい気持ち ・優しい雰囲気 	<ul style="list-style-type: none"> ・別れの寂しさや優しい気持ち、落ち着いた雰囲気を出すためにメロディーをしっかりとゆったりと弾く。(☆10)
場面7 ・元の世界に戻る。 ・部屋に宝石の割れた指輪を見つけ、物語は幕を閉じる。	曲9	ベツォルト作曲：『メヌエット』(16小節まで)	<ul style="list-style-type: none"> ・夢の世界だったのか？と不思議な気持ち ・ルカとの思い出 ・温かい雰囲気 	<ul style="list-style-type: none"> ・思い出、温かい雰囲気を出すために、メロディーをゆっくり、しっかりと歌って弾く。(☆11)

<場面4>

再び魔女に追いかけられる場面で『心配』が流れると、子ども達は不安な表情を浮かべていた。しかし、次の『ガヴォット』が流れると、やっとの思いで魔女から逃げ切ったりサの姿に、ほっとした表情で話にじっと聞き入っていた。(☆7☆8参照)

<場面5>

2つ目の願い事を叶え宝石が割れる場面で、前述の<場面3>と同じ前打音による効果音を使用した。集中力が途切れてきた様子が見受けられたが、この効果音が入るとハッとピアノに注目し、再び話をじっと聞いていた。(☆6-2参照)

『狩猟』が流れ大きなケーキが現れると、子ども達の笑顔や楽しそうな表情が見られた。(☆9参照)

<場面6>

『トロイメライ』が流れ、ルカが元の姿に戻った場面では、子ども達は安堵の表情を浮かべていた。アンケートの「リサっていう女の子が優しかったです。」との記述から、この話のテーマである「優しさ」を子ども達が十分に感じ取ったと言える。(☆10参照)

<場面7>

元の世界に戻り、ルカのことを思い返す場面で『メヌエット』を使用した。すると女兒がメロディをピアノの演奏に合わせて口ずさむ様子が見られた。おそらく『メヌエット』を聴いたことがあるのだろう。この様子から、音楽と物語の融合でより身近に感じ取られ、自然と口ずさむ様子が見られたのではないかと感じた。(☆11参照)

前述の通り、実際に子ども達の前で発表することを意識し〈ピアノお話ワールド〉の制作を進めていった。例年は学生同士の学内発表にとどまっていたが、現場での実践を意識すると様々な工夫が見られた。例えば、言葉の言い回し、話に合わせた選曲と演奏技法、話とピアノ曲のすりあわせなどである。また、話のイメージがより膨らむように効果音を自作し、使用するタイミングの調節を行った。授業内でも学生自身から「この言葉の方が子どもにはわかりやすいかな?」「こっちの曲の方が怖いイメージになるかな?」「ここは少しテンポを速くしてみたらもっと走っている感じが出るかな?」など子どもを意識して作品作りに取り組む姿勢が多く見られた。その結果、表6のCさん本人が工夫した点として挙げているものほぼ全てにおいて子どもの反応が見られ、アンケートからもその部分に注目していたことが窺えた。Cさんが子ども達に伝えたいと思えたテーマの「優しさ」、すなわちこの物語の主人公リサの優しい想いが、子ども達に音楽と物語の融合によって、自然と伝わったと言えるのではなかろうか。

先生方の感想アンケートにも、「よく考えられた曲が選ばれており、曲の速度をお話に合わせてよかった。」「指輪の宝石がパリンと弾ける音が印象的だった。」「優しいピアノの音色と、物語がマッチしていて良かった。」など、選曲、効果音、音楽と物語の融合といったCさん本人の工夫点に対応する記述が多く見られた。また話の中で、「3つ目の願いをルカのために使うという心温まるストーリーで、教室に戻った後、子ども達が、“私だったら〇〇に使うよ!”と楽しそうに話していました。」など物語からさらに想像を膨らませた子ども達の会話が多く見られたようだった。

子ども達のアンケートには、「ピアノが上手だったから私もあんな風に弾きたい。」「ピアノが絵の動きと合っていた。」「ピアノの演奏がなめらかできれいだった。」などの記述のほか、ピアノを演奏している姿の絵を描いてくれた子どもも何人もいた。このことからピアノそのものに興味、関心を示し、話の内容理解に加えピアノ曲や表現方法に生で触れたことで、表現意欲の向上に繋がったと言えるだろう。子ども達がこの〈ピアノお話ワールド〉を鑑賞し、感動を抱いてくれたことで、ピアノを弾いてみたいという表現意欲を引き出し、「鑑賞」から「表現」という領域を超え子ども達に音楽の素晴らしさを感じてもらうことに繋がったのだと筆者は考える。

5. まとめ

本研究では、教育・保育現場で生かすための実践的なピアノ表現力に焦点を当て、現場を意識した場合の学生の変容を追っていった。その過程で前論文において評価の低かった項目についての工夫点が多くみられた。これは、本学科の鍵盤授業において4年間を通して段階的に学習したイメージ形成力が確実に身につく、さらに集大成として〈ピアノお話ワールド〉の作品の中に組み込むことができたと言える。また現場での発表を意識することで、学生自身の楽曲分析やその場面に合う奏法やアレンジ、言葉の選定、内容の吟味、さらには話とピアノ曲のすりあわせにお

ける丁寧な練習も必要不可欠となり、学生自身のピアノ表現力とイメージ形成力を高めることができ、それと共に子どもの表現力を引き出すことにも繋がった。指導要領の目標と照らし合わせると、「(1) 曲想と音楽の構造との関わり (知識)」の部分は、音楽の構成要素を理解することが読譜力に繋がり、それが子ども達にとってイメージしやすい演奏となったことで、実感を伴いながら理解することができたと考える。また、子ども達にとっては、ピアノという身近な楽器を使用し、言語活動を伴った作品を鑑賞することで、ピアノの素晴らしさや興味をもつきっかけにもなり、目標である「(2) 音楽を味わって聴く (思考力、判断力、表現力)」ことができたと考える。そして、本授業におけるイメージ形成力の養成で培ったピアノ演奏力や表現力は、最終的に「(3) 音楽活動の楽しさを体験することを通して、音楽に関する感性を育む (学びに向かう力、人間性)」ことに繋がり、鑑賞した子ども達にとっても「音楽に親しむ態度」を育成することができ、学びに向かう原動力となる1つの場を提供することができたのではないかと思う。

6. おわりに

教育学部である本学科の鍵盤授業での目的は、ピアノを単に演奏することに焦点を当てるのではなく、将来の教育・保育現場の子ども達の前で、ピアノを生かしてどのような音楽活動を展開していけるのかを目指すものである。つまり子どもの表現意欲や表現活動を引き出すピアノ表現力を習得することが重要かつ必須と考える。

この度、学生は『鍵盤表現研究Ⅱ』で行う〈ピアノお話ワールド〉を制作する中で、自らの思いを子ども達に明確に伝えるために、子ども一人ひとりの心に響くピアノ表現とは何かをしっかりと考えたに違いない。何が理解でき、何ができるようになるか、どう創意工夫していくかを考え続けたことが、まさに学生のピアノ表現への意欲や上達に繋がったのではないだろうか。

また、前年度から2年間に渡って、〈ピアノお話ワールド〉で習得するピアノ表現力について、「学習評価」や「現場実践」という2つの視点でもって分析・考察を行ってきた。これらの研究成果により、この授業を集大成とするイメージ形成を基盤とした4年間のピアノ表現力養成カリキュラムの意義も併せて、筆者らは充分再確認できたと考える。今後も学生がピアノ学習の興味を理解し、自主的、主体的に一つ一つ丁寧にピアノ表現力を獲得して欲しいと願う。

謝辞 本研究にあたって、Y市S小学校の先生方や児童の皆さん、Y市K幼稚園の先生方や園児の皆さんのご協力をいただき、衷心より感謝申し上げます。

<注及び引用・参考文献>

1. 本廣明美、岡本美恵、脇淵陽子、藤井亜希子『創作音楽物語制作〈ピアノお話ワールド〉の意義と課題～自己評価による習熟度の可視化を基に～』山口学芸研究第11号 2020
2. 2020年度山口学芸大学講義概要 pp.173
3. 小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 音楽編
4. 本廣明美、岡本美恵、脇淵陽子、藤井亜希子『創作音楽物語制作〈ピアノお話ワールド〉の意義と課題～自己評価による習熟度の可視化を基に～』pp.88～89 山口学芸研究第11号 2020
5. 1年前期の授業において、子どもの動きを表現する曲として、「走る」イメージの曲を学習している。
6. 東 龍男作詞、平吉毅州作曲

<引用楽譜>

7. 本廣明美、加藤照恵『保育の現場で聴かせたい ピアノ名曲でこどもと遊ぼう』株式会社ドレミ楽譜出版社 2010